

## 小林和之『「おろかもの」の正義論』ちくま新書より

序 (抜粋)

「正しさ」を求めて

「正しい」ってどういうことなんだろう。

人間は、「正しい」ということが気になる生き物らしい。考えてみれば、不思議な話だ。自然界に「正義」なんてものは存在しない。「強さが正義」なんてのは、人間が自然界を見て勝手に想像しているだけのものだろう。「生きるか、死ぬか」「食うか、食われるか」というのはあるとしても、別にそれは正義とは関係がない。どちらかの事実があるだけだ。

でも、われわれは「正しい」かどうかが気にかかる。

「正しい」ことがあるということは、正しくないこと、つまり「してはならないこと」があるということでもある。どうしてそんなことを気にするのだろう。どうして、思いのままに、自由に生きようとししないのだろう。

『臨濟録』\*1 に、殺仏殺祖と呼ばれる下りがある。

なんじ如法の見解を得んと欲せば、

但、人惑を受くること莫れ。

裏に向かい、外に向かって、

逢著せば、便ち殺せ。

仏に逢うては、仏を殺し、

祖に逢うては、祖を殺し、

羅漢に逢うては、羅漢を殺し、

父母に逢うては、父母を殺し、

親眷に逢うては、親眷を殺して、

始めて解脱を得ん。

物と拘わらず、透脱自在なり。

ものごとを正しく理解したいなら、決して人に惑わされるな。出会う者すべてを殺せ。仏、開祖、聖人、父母、親族、自分にとって大切な者すべてを殺してはじめて悟りが開ける。こだわりから解放され、自由になれる。

おおざっぱに言うとそういう意味だ\*2。

もちろんこれは、殺人狂になれということではない。殺したいという欲求に捕らわれてしまっているのは、ひどく低次元な不自由だ。自分にとって神聖なもの・愛するものをも殺しうる。何者にも支配されず、何ごとをもなしうる。そうやって初めて悟りを開いたということができる、ということだろう。

そういう境地は確かに大自在の境地と言うべきかもしれない。しかし、それは厳しい修行の末にようやく到達できる究極の境地とも言うべきものだろう。凡愚になしうることではない。

そして、愚かな凡人としては、素朴な疑問も起きる。究極の自由の境地に達したら、後は何をして生きればいいのか。したいことをする、では欲望の奴隷とどう違うのだろうか。自分の行動を律する規範をもつなら、それに縛られているということではないのか。自分の決めたことにのみ従うというのでも、過去の自分に縛られているということではないか。そうではなく、いつでも規範を変えられるなら、規範を持たないのと同じではないか。

凡人には、究極の自由を手に入れるどころか、思い描くことさえ難しい。

世間では、仏や父母だけでなく、人を殺してはいけないことになっている。そして、凡人は、「人を殺してはいけない」と思う。これは、人の世の常識に惑わされているのだろうか。

なぜ人を殺してはいけないのか

20世紀の末に、「なぜ人を殺してはいけないのか」ということが話題になったことがある。これは、そういう子どもの問いかけに、その場にいたインテリたちが明確に答えられなかったことがきっかけだった。この問題について、雑誌で特集が組まれ、本も出版された。

これは、まず驚くべきこと、悲しむべきことだろう。日本には「なぜ人を殺してはいけないか」という素朴な問いかけに対して、答えを持っていない大人が非常に多いのだ。宗教の権威が弱体化してから久しく、成長と進歩の前に伝統は輝きを失い、政治家は並以下の人間としか思えず、正義を語る習慣もなく、無限の正義\*3が無限の胡散臭さを漂わせる現代。たぶん、わたしたちはもうとっくに気づいてしまっているのだ、人を殺してはいけない絶対的な理由などないことを。

だが、この事件は希望でもある。それは、「絶対的な権威」を信じられなくなっても、それでもなお「正義・正しさ」への求めがあることを示しているからだ。

「人を殺してはいけない理由はない。人殺しはムカツクから捕まえて殺すか閉じこめる。殺す方にも捕まえる方にも正義はない。力の強いほうが勝つだけだ」こう言い切ることには、一種の爽快感があるかもしれない。しかし、われわれの多くはそう考えはしなかったのだ。 - - はっきりとは言えないけれど、やっぱり人を殺してはいけないんじゃないか。そう思う人が多かったからこそ、答えを求めて本を手にとったのだろう。人にはなお、正義・正しさへの求めがある。

神や天のような、人間より上位の絶対的権威に訴えることなく、「なぜ人を殺してはいけないか」という問題に答え

るにはどうすればいいのだろうか。

約束事としての「正しさ」

たぶん、もっともがっかりさせる答えは、「法律で決まっているから」というものだろう。だが、この答えの中に「正しさ」を考える上でもっとも重要なポイントが含まれている。それは、法律は社会規範だということだ。神の命令でもなく、一人の人間の思いこみでもなく、人と人との約束事なのだ。だから、人間より上位の存在が保証してくれるような絶対の確かさはない。「法律で決まっているから」という答が人をがっかりさせる一つの理由はこのことだろう。

「車が道路の左側を通行しなければならない」のは、法律でそう決まっているからだ。「人を殺してはいけない」ということには、それと同程度の確かさしかないのだろうか。

もちろんそうではない。同じく人と人との間の約束事とはいえ、両者には大きな違いがある。生命には、個人の主観を超えた特別な価値があるのだ。このことは第一章で説明しよう。

「正しさ」は、人を超えた上位の存在が定めたものではない。人の内奥の神秘でもない。「正しさ」は人の上にもなく、心の中にもなく、人と人との間にある。そして、人と人との約束事であるということは、主観でどうにでもなるということではない。約束事の中には、ほとんど揺るぎなく決定されるものもある。そして、見事に約束することもできれば、無様に約束することもできる。人と人との約束事には理も必然もあるのだ。

本書のねらいの一つは、神の絶対に救いを求めず、人の内面に引きこもらず、立派に約束事を作り上げるために、「正しさ」の理と必然を、具体的に、誰にも分かるように解き明かすことである。

「正しさ」を定める規範とその原理は、誰にもわかるように語られなければならない。ここが自然法則と大きく違うところだ。引力の法則を理解していようがいまいが、ビルの窓から飛び出せば下に落ちる。だが、「正しさ」は人に理解されてはじめて「正しさ」としての力を持つ。納得して「正しい」と思うことによって人は規範に従うのだ。刑罰で威嚇して従わせることはもちろん可能だが、その服従をもたらしたのは「正しさ」の力ではない。そういう「力づく」こそ「正しさ」からもっとも遠いものだろう。

正義は勝ちも負けもしない

「正義は勝つ」「悪を滅ぼして正義を示す」。よく見かける言い方だ。だが、もし正義がそういうものでしかないとしたら、正義は悪に依存することになる。悪に勝ったり、悪を滅ぼしたりしないと存在することができないのだから。こういうたぐいの正義観をわたしは、暗黒的正義観と呼んでいる。それは、正義を暗黒、悪を光として扱うものだ。光があって、はじめて影が生じるのだから。悪という炎を消してすべてを闇に返すのが正義である、というのはもちろん少しばかり皮肉を込めた言い方なのだが。

「無限の正義」の名の下に、空爆をして「悪」を滅ぼす。いっしょに無関係の市民も殺す。「正義」はそういうものでしかあり得ないのだろうか。

だとしたら、「正義」なんていない。殺すための理屈なんて欲しくない。憎悪を言い換えただけの「正義」は、殺戮を拡大するだけだ。

「正義」にはどうしてもこういうイメージがつきまとう。だから、わたしは「正義」ということばが嫌いだ(ついでに言うと、「人権」ということばも嫌いだ)。そして、好き嫌いの問題だけではなく、誤解を避けるためにも「正義」と

いうことばは使わないほうがいいかもしれない。

わたしがずっと考え続けている「正しさ」は、勝ったり負けたりしないものだ。勝ち負けは争いを前提にしている。だが、争わないことにこそ「正しさ」はあるんじゃないか。

すべてを生かす。わたしが目指す「正しさ」とはそういうものだ。

それでも「正義」ということばを使う意味はある。一つは、熟語としての造語能力があるということ。「正義論」なら違和感がないが、「正しさ論」では収まりが悪い。そして、もっと重要なのは、暗黒的正義もまた確かに「正義」の一面だということだ。われわれは、悪を否定する正義も必要としている。

また、「正義」ということばを、暗黒的正義に独占させておいていいのだろうか。すべてを生かす「正義」を積極的に主張することにより、「正義」を光の中に取り戻すべきなのではないか？

そういう思いは残るのだが、やはり本書の中では誤解を避けるために「正義」ということばはあまり使わないことにする。そして「正義」という言葉を放棄してしまった訳ではないことだけは明言しておくことにしよう。